〔原著〕

大学生における性知識・性モラルと性行動との関係

今　野　木綿子[1)]・西　脇　美　春[2)]

Relationship of Knowledge about Sex and Sexual Morality to Sexual Activity in University Students

Yuko KONNO, Miharu NISHIWAKI

Abstract：Medical students and students of technology and education were comparatively studied on their attendance of sex education, knowledge about sex and sexual experience, in order to consider what relation is seen between knowledge about sex and actual sexual activities. In July 2002, 720 students in total of medicine and of technology and education of a national university of A Prefecture were surveyed by questionnaires on their attendance of sex education, sexual morality, source of sexual information, contraception, sexually transmitted disease and sexual experience. Students could reject voluntarily their questionnaires. In both groups, 98% of students have attended lecture of sex education. Contents of lecture are A. physiology, B. sexual behavior, C. psychological aspect with decreasing frequency. B is most frequent in medical students, and C in students of technology and education. Sources of sexual information were most frequent from their friends and next cartoon. Knowledge about methods of contraception and sexually transmitted disease was deep in medical students. Sexual intercourse was approved when “they have agreed” and “they love each other”, and it was approved in about 80% of both students. About 68% of students have experienced sexual intercourse, of which 60% ones have with 2 or more partners in both groups. About half students have sexual intercourse without contraception. There was difference in attendance of sex education, knowledge about sex and contraception between both groups, but no difference was seen in sexual behavior without contraception.

Keyword：university student, sex education, knowledge about sex, sexual morality, sexual activity

はじめに

近年，若い世代の望まない妊娠や人工妊娠中絶の増加がみられる。平成 12 年は総数 341,146 件の人工妊娠中絶が行われており[1)]，そのうち 20 歳未満が 44,477 件であり女子人口千対の実施率では 12.1 であった。人工妊娠中絶総数は平成 2 年（456,797 件）と比較すると全体としては減少しているが, 20 歳未満の中絶件数は 32,431 件であったのと比べると 1.37 倍と増加している。

原因として性に対する意識の変化が考えられる。最近はテレビや雑誌などで性に関する情報が飛び交っている。佐藤らの調査[2)] によると「大学生の性の情報源は雑誌・本が最も多く 85.8%，次いで友人 84.1%，テレビ・ビデオ 80.1%」であった。この結果から見てもマスコミュニケーションに

1）山中湖村立小学校
〒 401-0502　山梨県南都留山中湖平野 2435
Yamanakako Village Elementary School
2435 Hirano, Yamanakako, Tsuru County, Yamanashi Prefecture 401-0502

2）山形県立保健医療大学
〒 990 － 2212　山形県山形市上柳 260
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260 Kamiyanagi Yamagata City 990-2212

よって情報を得ている実態が伺える。

マスメディアによる性に関する情報は，興味本位の内容が，日常茶飯事に求めるまでもなく溢れており，青少年の性に対する興味に対して好ましくない方向で刺激を与えている。

このように，青少年の性行動は，マスコミュニケーションからの影響が大きく，性意識や性行動が開放的になっている。

若い人たちの性に対する意識や行動が変化する一方で，避妊についての知識や実行率は低いために望まない妊娠や性感染症につながっているのではないかと考える。

木村ら[3] の中絶を行った女性に対しての調査では「避妊についての知識と自信があったと答えた者は，既婚者 52%，未婚者 36%」であり，避妊に対して十分な知識がないまま性交を行っている現状が推測できる。

また，マスコミュニケーションからの情報も性交渉に焦点をおいたものが中心で，避妊についての情報はほとんど見当たらない。

このような環境の中で青少年は安易に性行動に走り，正しく避妊をすることは言うに及ばず避妊など考えもつかないのかも知れない，さらに人工妊娠中絶がどのようなものか知らないまま，一時の欲望を満たしていることが望まない妊娠につながっているとも考えられる。

性教育として避妊法を導入することには賛否両論があるものの，避妊の種類や特徴と各避妊に関する具体的な方法を教えることも一方法かもしれない。

しかし，最も基本的なことは，本人の身体的成熟や妊娠に関わる生殖器の構造や機能及び男女関係の心理・社会的知識，男女の性行為に必要な条件――十分な相互理解と男女平等の関係，双方が性行動の結果と責任を理解する，二人の人間関係が真の愛のレベルである等――について教育方法を工夫し定着させることが必要であると考える。

家坂[4] の調査では「性教育を受けた場としては 85.0％の者が学校をあげており，現在の日本の性教育は学校教育がその中心にあったことを端的に表している」と性教育の場としては，学校が重要な場として位置づけられている。しかし，学校での性教育の成果については明らかにされていない。そこで，性教育の実態と性や避妊などに関する知識の程度が性行動にどのような影響を与えているかを知りたいと考えた。

医学部の学生は大学で性や避妊，性感染症などに関する講義を受けているが，工学部や教育学部の学生は性に関する講義が少ないため，性に関する知識や避妊に関する知識，意識に差があると考えられる。知識の有無や程度が性意識や性行動に影響しているか否かを知るために，医学部の学生と工学部，教育学部の学生を対象に調査を行った。

研 究 目 的

性に関する知識の有無と程度（性教育の受講の内容と程度など）が性意識や性行動にどのような影響を与えるかを明らかにし，今後の性教育のための基礎資料とすることを目的に調査した。

研 究 方 法

1．調査場所：山梨大学と山梨医科大学（現在は統合し山梨大学）

2．調査対象：工学部，教育学部（工学部 160 名，教育学部 160 名），医学部（医学科 200 名，看護学科 200 名）の 1 ～ 4 年生の計 720 名。

＊工学部，教育学部については，以後工・教育学部とする。

3．調査期間：2002 年 7 月 1 日～ 7 月 12 日

4．研究方法：調査研究

1）調査内容：

性意識については金田ら[5]の研究を参考に，性教育・性情報源に関する部分は日本性教育協会[6] の調査票を一部使用した。避妊方法，性感染症，人工妊娠中絶に関する部分は自作の調査票を使用した。

2）配布・回収方法：

医学部については研究者本人が配布・回収を行い，工・教育学部については研究者が依頼した協力者に配布・回収を行ってもらった。

3）倫理的配慮：

プライバシーを保護するため個人を特定できないよう統計処理することと協力や中断は自由意志であることを伝え了解を得て実施した。

4）分析方法：

統計解析ソフト SPSS（Ver.10.0）を使用し単純集計，x^2 検定を行った。

結　　果

配布枚数 720 枚中回収枚数 478 枚であり，回収率は 66.4％で，そのうち有効回答は 425 枚（59.0％）であった。

1．対象者の属性

今回の対象者を工・教育学部，医学部別にみた男女の割合は，医学部では男性 68 名（29.3％），女性 164 名（70.7％），工・教育学部では男性 104 名（53.9％），女性 89 名（46.1％）であった。両群の合計では男性 172 人（40%），女性 253 人（60％）であった（表 1）。

居住形態で最も多いのは両群合わせて「アパート」で 301 名（70.8%）であり，つづいて「実家」が 96 名（22.6%），「異性と同棲」が 12 名（2.8%）であった（表 2）。

2．性教育で学んだ内容と今後学習したい内容

1）性教育を受けた学生数（率）

性教育を「受けたことがあった」と回答した学生は両群合わせ 417 名（98.1％）であり，「受けたことがない」と回答した学生は 8 名（1.9％）であった。

「受けたことがあった」学生は，工･教育学部の学生が 191 名（99.0％），医学部の学生が 226 名（97.4％）であり，工・教育学部と医学部に有意差はみられなかった（図 1）。

2）性教育を受けた時期

性教育を受けた時期は図 2 に示したように，両群共に中学校が最も多く（69％，67％），小学校，高校の順であった。性教育を受けた時期の内中学校を除く小学校，高校，大学では医学部の学生の受講率が有意に高かった。

3）性教育の授業内容

性教育で学習した内容を①生理学的な側面の内容を表す領域，②性行為及びそれに付随する側面を表す内容，そして③性の心理・倫理的側面を表す 3 領域に分類した（それぞれの内容については図 3 参照）。

性教育で学習した内容としては生理学的側面については「初経（月経）」，「二次性徴」など全てが 80％以上であった。

性行為付随側面では「エイズ」の両群の平均は 86.6％と学習率は高く，「避妊の方法」と「性感染症の知識」については，工・教育学部に比べて医学部のほうが受講した学生が有意に多かった。

心理的側面の回答で最も多かったのは「思春期の心理」を受講した学生が 6 割と 8 割で両群共に多いが，工・教育学部の学生の受講率が有意に多かった。さらに，「性に関する不安や悩み

表 1　学部，男女別回答学生と年齢（n ＝ 425）

学　部	男性（%）	女性（%）	計（%）	平均年齢
医	68（16）	164（39）	232（55）	20.5
工・教	104（24）	89（21）	193（45）	20.2
合　計	172（40）	253（60）	425（100）	20.4

表 2　学生の居住形態（n ＝ 425）

住　　居	人　数	%
アパート	301	70.8
実　　家	96	22.6
異性と同居	12	2.8
下　　宿	9	2.1
寮	5	1.2

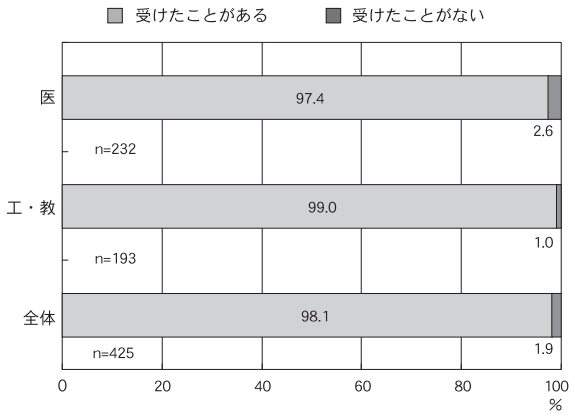

図 1　性教育を受けた学生数（率）

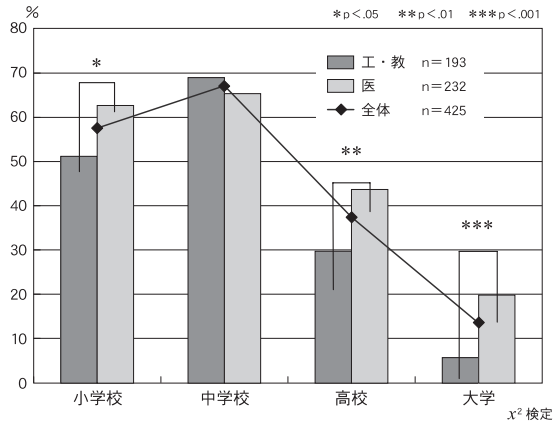

図 2　性教育を受けた時期（複数回答）

の相談にのってくれるところ」「性欲の処理の仕方」も，工・教育学部の学生が有意に多かった（図 3）。

4）性教育への評価

今までの性教育は役に立ったかという質問に対して「非常に役に立った」「役に立った」と答えた学生は，両群合わせて 266 名（63.8%），「どちらともいえない」「役に立たない」と答えた学生は 151 名（36.2%）であった。

「役に立つ」と答えた学生は，工･教育学部では 61.8%，医学部の学生は 65.5%であり，系によって有意差はみられなかった（図 4）。

5）性教育に対するニーズ

性に関する内容で今後学習したい内容は生理的側面ではどの項目も両群共に 5%未満であった。性行為付随側面は「性感染症の知識」が最も多く全体で 112 名（26.4%），「エイズ」「避妊の方法」「性交」は全体で 10 ～ 20%であった。心理的側面では「愛とは何か」が最も多く両群それぞれ 3 割であったが，他の内容の学習希望者は 1 割以内であった。

「男性と女性の心理や行動の違い」「思春期の心理」につい学習を希望している学生は 2 割以下であるが，医学部の学生が有意に多く希望していた （図 5）。

3．性に関する情報源

性に関する情報源として最も多かったのは「友人」で両群共に 76.7%であり，「マンガ・コミックス」「テレビ・ラジオ」「新聞や雑誌の記事」「ビデオ」からの情報の得方は，両群共に似た傾向を示し，約 30 ～ 40%の範囲であった。「学校の授業」と回答した学生は工・教育学部が 30%，医学部が 25%であった。

「ビデオ」からの情報収集に有意差がみられ，医学部より工・教育学部の学生が有意に多かった（図 6）。

4．避妊方法の理解度

1）基礎体温の用語及び内容の理解

基礎体温という用語を知っている学生は，工･教育学部学生が 150 名（77.7%），医学部学生が 217 名（93.5%）であり，医学部の学生がほうが有意に知っていた（表 3）。

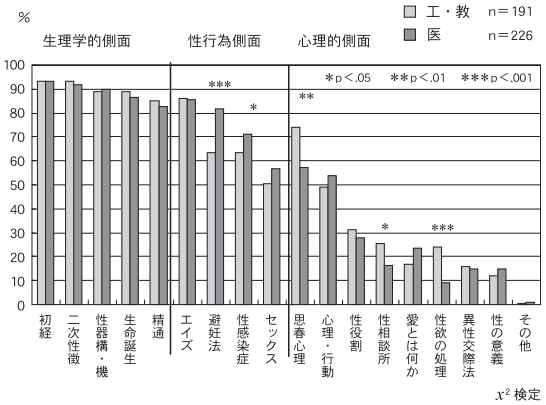

図 3　性教育の学習内容（複数回答）

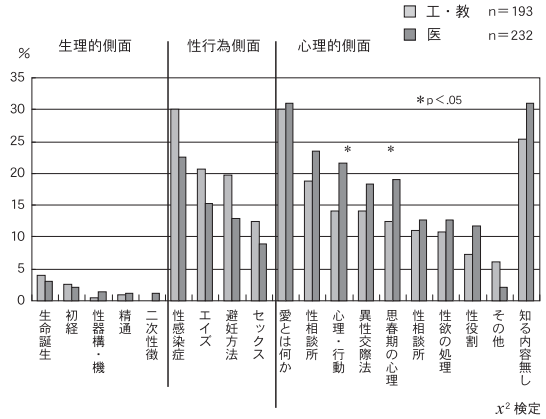

図 5　性教育の学習内容（複数回答）

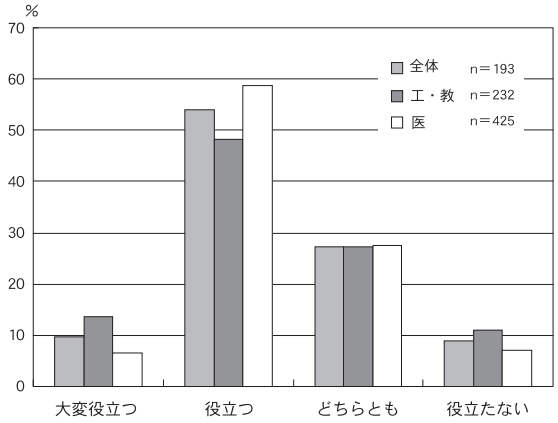

図 4　性教育に対する評価

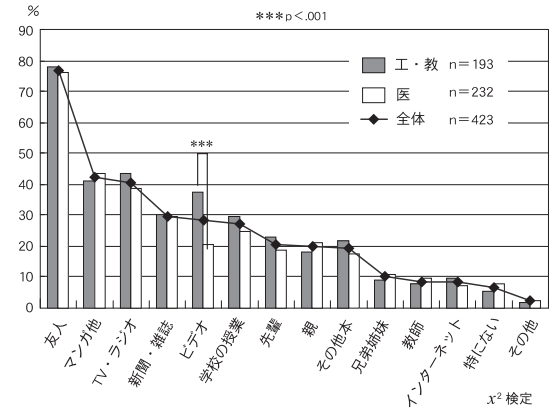

図 6　性に関する情報源の比較

内容について，両群ともに正解率の高かったものは「排卵日が分かる」が 8 割前後と「妊娠時期が分かる」であった。有意差のあった内容は「避妊効果が低い」などの 3 項目において，医学部の正解率が高かった（表 4）。

2）コンドームの用語及び内容の理解

用語については，工・教育学部の学生 99.5%，医学部の学生 100% が知っており，有意差はみられなかった（表 5）。

両群ともに正解率が 8 割以上の内容は，「再利用できない」，「性感染症を予防できる」など 4 項目であった（表 6）。

コンドームに関する内容についての正解率は「使用期限がある」，「2 重使用は効果がない」「性感染症を予防できる」の 3 項目については，医学部が有意に理解していた（表 6）。

3）経口避妊薬（ピル）の用語及び内容の理解

経口避妊薬という用語を知っている学生は，工・教育学部学生が 90.7%，医学部学生が 99.1% であり，医学部の学生が有意に多かった（表 7）。

ピルに関する正解率について有意差のみられた質問項目は，「避妊効果が高い」，「毎日服用する必要がある」など 5 項目については医学部学生の正解率が有意に高く，両群が共通して正解率が 7 割以上の項目は「避妊効果が高い」，「医師の診断が必要」など 5 項目であった（表 8）。

5．性感染症（STD）という用語を知っている学生の割合

性感染症という用語を知っている学生は，工・教育学部では 84.5%，医学部で 92.7%であり，医学部学生の知っている割合が有意に多かった（表 9）。

性感染症の用語の内，図 7 に示したように「エイズ」については，多くの学生が知っており両群ともに 95%以上であった。

次に，「クラミジア」「梅毒」「淋病」「性器ヘル

表 3　基礎体温を知っている割合

学　部	知っている	有意差
工・教	150（77.7%）	***
医	217（93.5%）	
計	367（86.4%）	

x^2 検定　***p<0.001

表 4　基礎体温に関する正解者の比較

項目 ＼ 学部	工・教(n=150)	医(n=217)	全体(n=367)
避妊効果低い	50（33.3%）	** 102（47.0%）	152（41.4%）
排卵日分かる	121（80.7%）	* 193（88.9%）	314（85.6%）
妊娠時期分かる	130（86.7%）	201（92.6%）	331（90.2%）
確実な時期不明	83（55.3%）	129（59.4%）	212（57.8%）
STD 予防できない	101（67.3%）	** 174（80.2%）	275（74.9%）

x^2 検定　*p<0.05　**p<0.01

表 5　コンドームを知っている割合

学　部	知っている
工・教	192（ 99.5%）
医	232（100.0%）
全体	424（ 99.8%）

x^2 検定

表 6　コンドームに関する正解者の比較

項目 ＼ 学部	工・教（n=192）	医（n=232）	全体（n=424）
避妊効果高い	163（84.9%）	210（90.5%）	373（88.0%）
再利用できない	178（92.7%）	223（96.1%）	401（94.6%）
使用期限ある	135（70.3%）	*** 197（84.9%）	397（84.9%）
サイズがある	118（61.5%）	154（66.4%）	272（64.2%）
2 重使用効果ない	49（25.5%）	** 92（39.7%）	141（33.3%）
性交痛おこる	44（22.9%）	51（22.0%）	95（22.4%）
STD 予防できる	160（83.3%）	** 222（95.7%）	382（90.1%）

x^2 検定　**p<0.01　***p<0.001

表 7　ピルを知っている割合

学　部	知っている	有意差
工・教	175（90.7%）	***
医	230（99.2%）	
計	405（95.3%）	

x^2 検定　***p<0.001

表 8　ピル関する正解者の比較

項目 ＼ 学部	工・教（n=175）	医（n=230）	全体（n=405）
避妊効果高い	132（75.4%）	* 196（85.2%）	328（81.0%）
医師の診断必要	138（78.9%）	185（80.4%）	323（79.8%）
保険適用なし	65（37.1%）	113（49.1%）	178（44.0%）
禁忌ある	122（69.7%）	164（71.3%）	286（70.6%）
副作用軽度	77（44.0%）	121（52.6%）	198（48.9%）
毎日服用する	89（50.9%）	** 156（67.8%）	245（60.5%）
中断中は妊娠	93（53.1%）	* 150（65.2%）	243（60.0%）
STD 予防できない	104（59.4%）	*** 199（86.5%）	303（74.8%）
男性使用できない	113（64.6%）	** 79（77.8%）	292（72.1%）

x^2 検定　*p<0.05　**p<0.01　***p<0.001

表 9　性感染症を知っている場合

学　部	知っている	有意差
工・教	163（84.5%）	**
医	215（92.7%）	
計	378（88.9%）	

x^2 検定　**p<0.01

ペス」については，医学部が 78 ～ 91％，工・教育学部の学生は 39 ～ 78％であった。エイズ以外の性感染症（STD）全において，医学部のほうが知っている学生の割合が有意に多かった（図 8）。

6．性交，避妊に対する意識と性行動の現状

1）未婚者の性交の是非と理由

図 8 に示したように，「未婚者の性交の是非」に対する回答については，容認する学生は医学部が 85.3％，工・教育学部が 78.2％と両群とも多かった。

性交を是認する理由として，最も多かった項目は「お互いが納得していればよい」が両群共に 80％以上であり，次が，「愛し合っていればよい」という理由に対して 70％以上の学生が容認していた（図 9）。

性交を是認する理由の内，回答率が低いものの両群間に有意差のあった理由は「その場の雰囲気」「衝動にかられて」「早く経験したい」「皆がしているから」であったが，これらの項目全てについては，工・教育学部学生が有意に多かった（図 9）。

2）性交の経験と人数

表 10 に示したように，系別の性交経験の結果は工・教育学部学生の「経験あり」は 68.4％，医学部学生は「経験あり」は 65.5％であった。

初めて性交を経験した平均年齢は工・教育学部が 17.6 歳と医学部が 18.04 歳で工・教育学部の学生のほうがが有意に年齢が低かった。

性交時の対象人数は両群で近似した傾向を示しており，両群の平均経験人数は，1 人が 114 名（40.1％）と最も多く，次に多い人数は医学部では 2 名（27.6％），工・教育学部は 3 ～ 5 名（25.8％）であった（図 10）。

3）性交時の避妊の実態

性交時の避妊状況を図 11 に示したが，工・教育学部学生と医学部学生を比較すると「必ず行う」と答えたのは工・教育学部 62 名（47.0％），医学部 83 名（54.6％）であった。

「行わないことがあった」が工・教育学部 43.2％，医学部 39.5％，「ほとんど行わない」が工・教育学部 9.8％，医学部 5.9％であり，学部によって避妊の実態に有意差はみられなかった。

4）避妊をしなかった理由

避妊を行わなかった理由として最も多かった

表 10　性交経験の有無

学部，n	ある学生	（％）	ない学生	（％）	経験年齢
工・教 n=132	132	68.4	61	31.6	17.6
医 n=232	152	65.5	80	34.5	18 **
合　計 n=425	284	67	141	33.1	17.8

x^2 検定　**p<.01

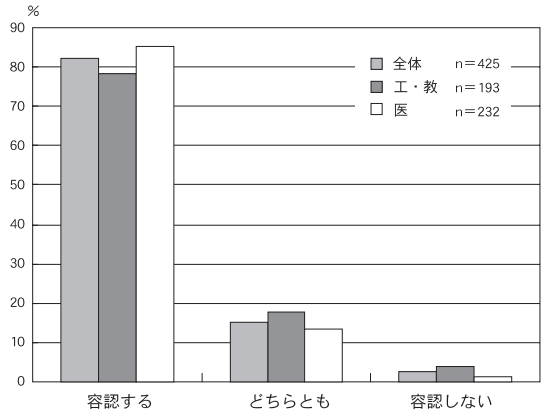

図 8　未婚者の性交の是非

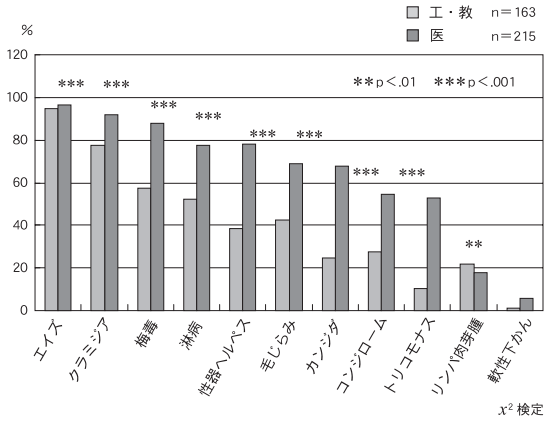

図 7　性感染症に関する用語の比較（複数回答）

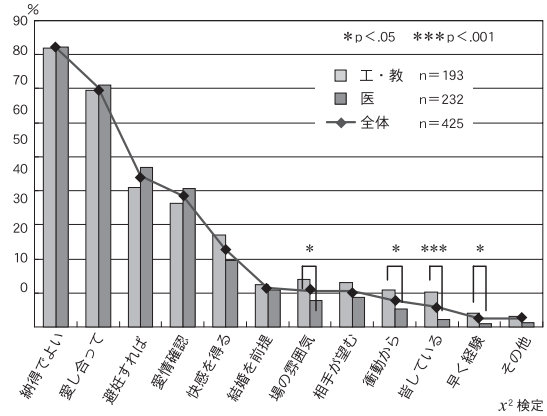

図 9　性交是認理由の比較

のは「避妊具がなかった」であり，工・教育学部学生で 33 名（47.1％），医学部学生で 30 名（43.5％）であった。「面倒くさい」は医学部，工・教育学部それぞれ 34％と 46％であり，「妊娠しないと思った」が 36％と 24％であった。理由に両群間に有意差はみられなかった（図 12）。

5）性交時の避妊方法と避妊の決定者

避妊具を使用していると回答した学生の内，最も多かった方法は「コンドーム」であり，工・教育学部で 127 名（96.2％），医学部では 149 名（98.0％）で，有意差はみられなかった。

次に「膣外射精」は，工・教育学部が 31％，医学部が 25％であり，「基礎体温法」「オギノ式」は両群で 5％前後，「経口避妊薬（ピル）」は約 2％，「女性用コンドーム」は約 1％，「不妊手術」，「その他」への回答者はいなかった（図 13）。

避妊をするかしないか決定した者は，「お互い」が最も多く，工・教育学部の学生は 83 名

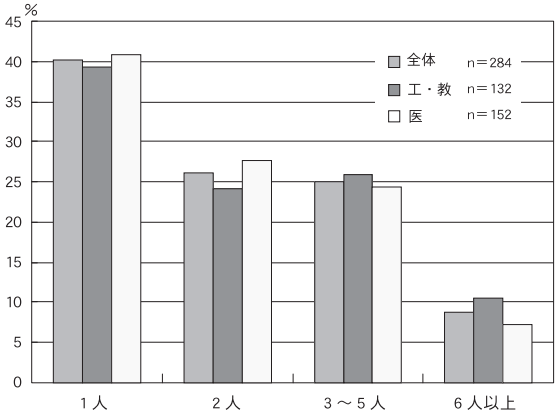

図 10　現在までの性交体験人数

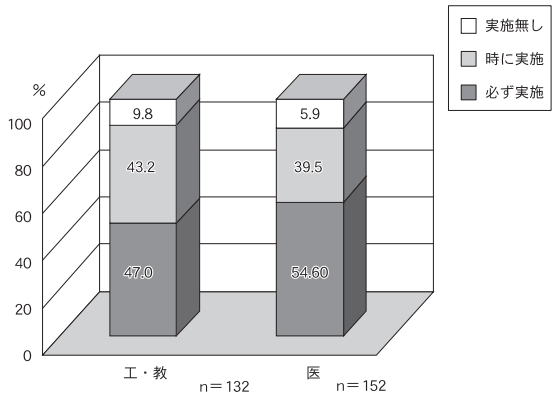

図 11　性交時の避妊の実態

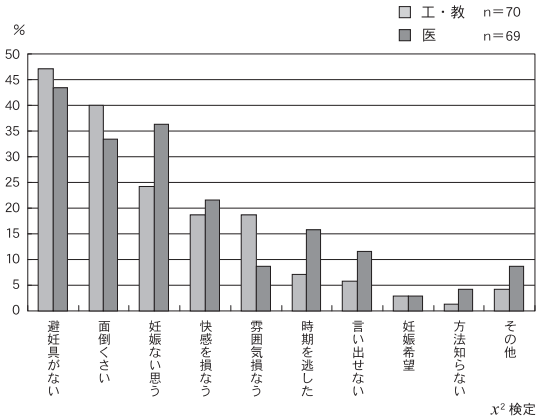

図 12　避妊しなかった理由（複数回答）

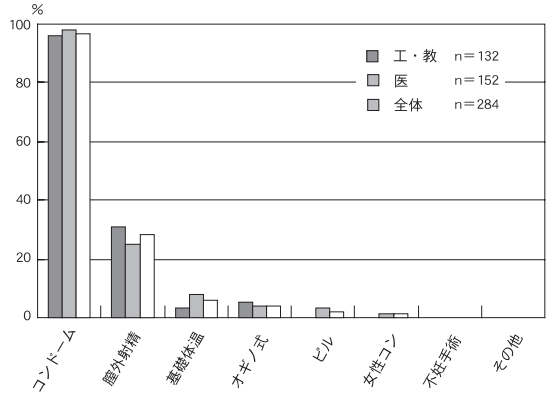

図 13　性交時の避妊方法（率）

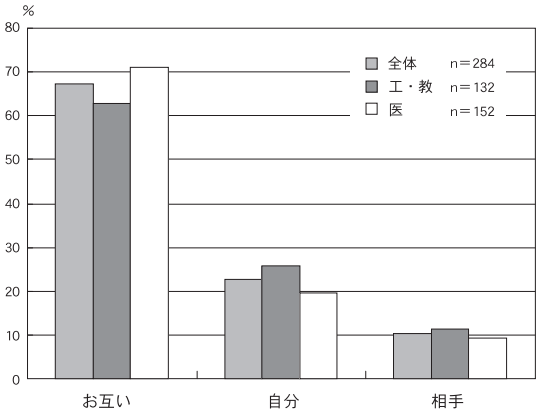

図 14　避妊を決定した者

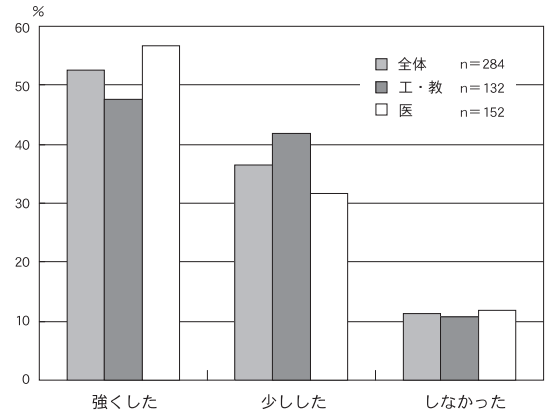

図 15　避妊の意思表示

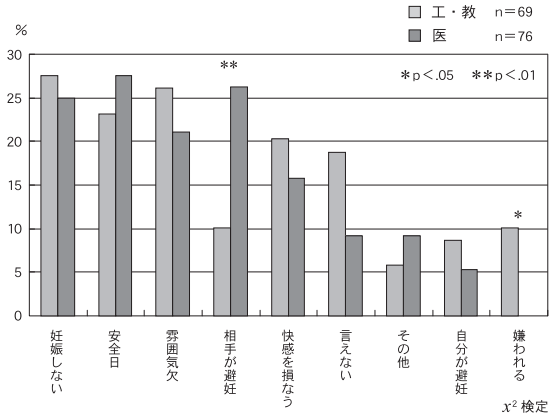

図 16　意思表示しなかった理由

(62.9%)，医学部の学生は 108 名（71.1%）であり，有意差がみられなかった（図 14)。

6）避妊の意思表示と意思表示しなかった理由

避妊の意思表示の程度は「強くした」と答えた学生が最も多く，工・教育学部は 47.7%，医学部は 56.6%であり，系によって意思表示の程度に差はみられなかった（図 15)。

意思表示しなかった理由は「妊娠しないと思った」「安全日だと思った」が夫々約 28%，「雰囲気が損なわれる」が 25.2%，「快感が損なわれる」が約 20%であり，「相手がいつも避妊するから」は医学部の学生が有意に多く，「嫌われたくないから」は工・教育学部の学生が有意に多かった（図 16)。

考　　察

1．対象の背景

今回の対象者は工・教育学部では男性（60%）が多く，医学部では女性（70%）が多かった。

約 7 割の学生がアパートで生活しており，実家で親と生活している学生は 2 割程度であった。この結果は今回の調査対象とした学生が国立大学の学生であり，県外出身者が主であったためアパートで一人暮らしをする学生が多かったと考えられる。

2．性教育の学習状況と今後学習したい内容

今回の調査では，工・教育学部 99%，医学部 97.4%の学生が性教育を受けたと回答しており，ほとんどの学生が性教育を受けていた。日本性教育協会[6] 第 5 回調査の性教育の学習率についても「大学生で男子 94.9%，女子 98.0%」であり，今回の結果と近似した結果であった。

性教育を受けた時期に対する回答者の多い順位は，中学校，小学校，高校であった。

対象とした学生が受けたであろう平成元年の旧学習指導要領[7] や性教育指導書[8] には，小学校から高等学校の体育，保健体育に性教育に関する記述があった。このことから小学校，中学校，高校のいずれでも性教育は行われていたと考える。

中学校で性教育を受けたと認識していた学生が最も多いが，この結果は，中学生は特に性への関心が高まる時期であり，身体的にも性的変化が最も活発であったことと，月経や射精などリアルな体験をほとんどの生徒が体験した時期であり，さらに講義が小学校に比較しより具体的になった[8] ことなどにより中学校での性教育が強く記憶に残っているのではないかと考えられる。

中学校以外は医学部の学生の学習者が有意に多かったが，医学部では現在も性について学習の途中であり，現在のことと過去のことを連動させて考えやすく，工・教育学部の学生よりも性教育を受けた時期についての回答者が有意に多くなったと考えられる。

工・教育学部は，大学で性教育を受けたことがあったと答えた学生が少ない。工・教育学部では一般教養の中に性教育と認識される講義があったものの，選択しないかぎり性教育を受けることができない。

それに対し医学部の学生の場合は，性に関する講義が必修であり性教育の講義を受けたと答えた学生が多かったと考えられる。

性教育の受講内容を，両群の結果から概観すると，生理学的側面全項目が学習率 80%以上と高く，性行為付随側面は 50 ～ 85%であった。心理的側面の学習率については，最も回答率が高い「思春期の心理」以外の内容は回答率が低い結果であった。

日本性教育協会[6] の調査によるとの第 5 回調査で大学生の学習率は「多い順に月経（初経)，性器のつくりと働き，二次性徴，精通（射精)，　生命誕生，エイズでありいずれも過半数を超えている。ついで思春期の心理が 4 割程度であった。性交については 2 割にすぎなかった。」という結果であった。

今回の調査では「性器のつくりと働き」と「生命誕生や精通（射精)」，「エイズ」は 8 割以上と高

率であり，先行研究の報告に比較し，生理学的側面については学習したという認識率が2倍に上昇したと言える。

性行為付随側面である「性交」について学習したと回答した学生は54％であり，日本性教育協会[6]の第5回調査では「性交」については2割の学習者であったと報告しているが，それに比較し約2倍以上に増加している。

この結果は，最近青少年期の性行動が活発になり，人工妊娠中絶など性交にまつわる問題の増加に対する対策として，実際に性交に重点をおいた授業が計画され，性教育を受けたと認識した学生が増加したものと考える。

「避妊の方法」や「性感染症」については工･教育学部に比較し医学部が有意に学習したと回答した学生が多かったが，これは医学部の学生は大学で避妊や性感染症に関する学習中であり，過去と現在の学習を混同し工・教育学部より学習率が高くなるという結果を招いたことも考えられる。

心理的側面については，生理的側面や性行為付随側面と比較すると学習したと回答した学生が少なく，記憶にとどめられていない。

心理的側面についての学習率が低い結果は，性教育では「性の不安や悩み」「異性との関り」などと表現されており，学生の期待する内容とのずれにより，性教育として認識されなかったのかもしれない。

また，「思春期の心理」，「性に関する不安や悩みの相談にのってくれるところ」，「性欲の処理の仕方について」は，工・教育学部のほうが学習したと回答した学生が有意に多かった。

対象とした学生が受けたであろう平成元年の旧学習指導要領[7]や性教育指導書[8]によれば，小学校，中学校，高校のすべてに性教育に当てはまる項目はある。しかし，性教育と明記されたところはなく性教育に関する項目はさまざまな教科の中に分散し学習されている。

そのため学生には性教育として認識されない項目もあったのではないかと考える。

学習したと回答の多かった生理学的側面については，体育，保健体育で講義が行われているので性教育として認識されやすい。しかし，「性役割」，「男女の違い」など心理的側面に該当する内容は，道徳，学級活動の中で講義が行われていたため，性教育と認識されなかったと考える。

日本性教育協会[6]の調査によると，「男子の回答がやや高いのは性感染症の知識，性欲の処理の仕方，思春期の心理であった」とあった。

今回の調査では工・教育学部の回答者に男性が多かったことに関連し，これらの項目に工・教育学部が有意に多かったと考えられる。男性は，性に対して能動的であり，「性に関する不安や悩みの相談にのってくれるところ」，「性欲の処理の仕方について」は関心があり，興味を持って講義を受けた結果であろう。

性教育に対する評価，「役に立った」と答えた学生は両群合わせ6割以上であったが，日本性教育協会[12]の調査によると「大学生になると『非常に役に立つ』という回答は47.1％」とあった。

これと比べると今回の調査では役に立つと感じた学生が増加している。日本性教育協会で調査を行った1999年と比べると学校での性教育が学生のニーズにあった教育が行われ，役立ったと回答した学生が増加したと考える。

性教育に対するニーズは，生理学的側面について学習希望している学生は少なかった。多くの学生がこれまでの性教育で学習したと認識しているため改めて学習する必要はないと判断し，さらに，生理学的側面の情報についてはマスメディアや交友関係から情報を得ることが可能であったことも関係していると言える。

性行為付随側面の各項目に学習したと回答した学生が約50～80％であり，更に，学習したいという希望者が10～20％であり，心理的側面の学習者は少なかったにもかかわらず，心理学的側面の学習希望率が10～30％で3項目とも希望者が少なかったことは，調査であげている内容が科学的な教育内容というより，精神論的，倫理的な道徳的な要素を感じ取り学生の期待するものと乖離していたことも考えられる。

3．性に関する情報源

日本性教育協会[6]の調査によると「男女とも友人が半数～8割程度と最も多く，マンガ・コミックスやテレビ・ラジオなどのマスメディアも多い。それに比べて学校の授業と回答した者は12～25％程度であり教師は5～7％といっそう低い」と報告している。

また，佐藤ら[2] の調査では「雑誌・本が最も多く全回答者 598 名中 229 名（85.5％）であった。次いで友人 84.1％，テレビ・ビデオ 80.1％でありこれらは他に比べて有意差を認めた」と発表している。

今回の調査でも「友人」が 78％と最も多く，「マンガ･コミックス」42％や「テレビ･ラジオ」40％，「新聞や雑誌の記事」，「ビデオ」などのマスメディアを通したものが上位を占めており，性教育を受けているにもかかわらず，教師は 1 割と少なく先行研究と同様な結果であった。

これらの調査結果は，最近性教育の方法として「ピアカウセリング」が導入されている根拠になっているといえる。

４．避妊方法の理解度

１）基礎体温，コンドーム（男性用），経口避妊薬（ピル）

基礎体温，コンドーム，経口避妊薬（ピル）という用語については，コンドーム以外は医学部の学生が有意に知っており，3 種類の避妊の方法の知識の平均得点に関しても医学部が有意に高かった。

さらに，避妊の種類による避妊効果や目的などに関する正解率の比較では，基礎体温，コンドーム，経口避妊薬（ピル）の 3 種類の質問項目のうち 4 ～ 6 割の項目において医学部の正解率が有意に高かった。

この結果は，医学部学生が調査時点で性に関する学習内容が必修科目として組み込まれており，知識や正解率が高くなったものと考える。

「コンドームは避妊効果が高い」と「再利用できない」に対する両群の正解者は90％前後であった。日本ではコンドームが最も使用されている避妊方法であり避妊効果についても多くの学生が知っているものと考えられる。

「2 重使用できない」ことや「サイズがある」「性交痛がある」などは，正解率が低く 3 割程度であった。したがって正しく避妊が行われていないことが考えられるので，性教育では使用方法など具体的な内容を教える必要がある。

コンドームを使用することにより「性感染症を予防できる」ことは正解率が 9 割と高く，多くの学生が理解している。これは中学校や高等学校において性教育に性感染症の教育が行われていることから，エイズ感染予防法としてコンドームが有効であることを教えてられていることによると考える。

ピルについては両群合わせて 95％の学生が知っていた。ピルは 1999 年に避妊薬として「低用量ピル」が認可され，そのころに話題となったので多くの学生が知っていたのではないかと考えられる。

ピルに関する正解率については，医学部の学生のほうが，9 項目中 5 項目について有意に正解したが，これも他の避妊方法同様，医学部では大学の講義で学習しているためであると考える。

ピルを購入するためには医師の診断が必要であるが正解率は全体で約 80％であり，購入するためには医師の診断が必要であったことは多くの学生が知っている。

しかし，医療保険が適用されないことについては正解率が全体で 45％とあまり知られていない。ピルを購入する際に費用がどの程度かかるかも知らない学生が多い。したがって性教育では入手方法，費用，服用方法（毎日服用する必要があったこと，中断中も妊娠すること）なども具体的に教えていく必要があるといえる。

ピルは低用量であり，副作用は軽度とされている。しかし，副作用に関する質問の正解率は 50％前後であった。それまでのピルは副作用がひどいとされていたので，低用量ピルも副作用が軽度であることを知らないことが考えられる。

また，禁忌があったことについては正解率が両群の平均 70％であった。しかし，どのような人がピルを使用できないのかを理解しているかは不明であった。したがって学生本人が自分は使用できるか判断できる情報を提供することが必要である。

５．性感染症に関する用語の認知度の比較

今回の調査ではエイズについての用語を知っている学生は両群ともに 9 割以上と高く，クラミジアは 80％以上，梅毒は 60％以上の学生が知っており，「ソケイリンパ肉芽腫」，「軟性下かん」以外については，医学部の学生は 6 割以上が知っており，さらに，エイズをのぞいた性感染症の知識の全ての項目において医学部の学生が有意に知っていた。

この結果は，医学部の学生は大学で性感染症

(STD) は学習内容として計画されており，講義を受けているためであったと考えられる。

河野[9]の調査では「性感染症という言葉を知っていますか？という設問に対して大学生の 98％が知っていると回答した」とあった。

河野の調査対象が医療短期大学の学生であったこともあり，今回の医学部学生と近似した結果を得たのであろう。しかし，工・教育学部学生は低い結果であった。

河野[9] の調査では知っている性感染症の名前は，「大学生で過半数に達するのはエイズ, クラミジア, 梅毒」という結果であった。

今回の調査では，河野の結果に比較し性感染症の名前を知っている率は高かったが，エイズは，増加傾向にあり生命に直接関係しており，STD の中でも重要視されている。このようなことから，最近は，小学校の性教育にも組み込まれている。

6．性交，避妊に対する意識と性行動の現状

1）未婚者の性交是認に対する意識の比較

今回の調査では，未婚者の｛性交｝を是認している学生は，医学部が 85％，工・教育学部が 78％であった。

金子ら[5] の研究では「男性 76.7％，女性 69.6％がしてもいいと思うと答えている。してはいけないと答えたのは男性 3.0％, 女性 3.9％」であった。

また，藤沢ら[10] の研究結果でも「約 84% がしてもいいと答えていて，してはいけないと答えているのは男性 1.4％，女性 1.9％」であった。今回の調査結果も容認している学生が多く，先行研究と近似した結果であった。

また, 金子ら[5]の研究では性交してもいい理由として,「お互いに納得していればよいが男性が 47.8％，女性 50.7％と最も多く，次にはお互い愛し合っていればよいが男性 37.8％，女性 33.8％であった。避妊していればよいが男性 10.3％，女性 8.5％であり，結婚を前提としていればよいが男性 1.3％，女性 2.1％」であった。

今回の調査でも性交をしてもいい理由として「納得していればよい」が両群ともに 8 割と最も多く,「愛しあっていればよい」が 7 割で先行研究より未婚者の「性交」を容認する学生が増加していた。

「結婚を前提とすればよい」は 11％程度であった。このような結果から最近の学生には「性交＝結婚」という考え方がかなりに薄れてきており，性交を他のコミュニケーション手段と同じように考え行動している様子が伺える。

「その場の雰囲気」「衝動にかられて」「早く経験したい」「皆がしているから」については，6 割の男性で構成されていた工・教育学部学生が有意に多くみられた。

2）性行動の実態

今回の調査では性交の経験学生が 425 名中 284 名であり, 工・教育学部 68.4％, 医学部 65.5％で両群の平均が 67％であった。

金田ら[5]の調査では「実際に性交を経験しているものは，男性 58.4％，女性 42.2％」であり，佐藤ら[2]の調査では「全回答者 598 名のうち 346 名（57.9％）が性交経験ありと答え，学年が高くなるにつれて増加している」と報告している。また，日本性教育協会[6] の調査では「大学生男性 57.9％，女性 50.5％」であった。

先行研究ではいずれの研究においても性交の経験率は，女性より男性のほうがが高い傾向を示した。

今回の調査では工・教育学部と医学部の間で有意差はみられなかったが，経験率は工・教育学部の方が多かった。

性交の経験率は，工・教育学部は男性の割合が高く，医学部は女性の占める割合が高かったことや先行研究においても男性の方が多かった。

これらの結果は，男性と女性の身体的機能構造の側面や心理・社会的側面から派生する性差による性行動の特徴を現しているといえる。

さらに，パーソナルなコミュニケーションの側面から性交経験について調査した日本性教育協会の報告は,「PHS，携帯電話を持っている者では，男子の 43％，女子の 32％が性交を経験しているのに対して，持っていない者の経験率は男子で 10％, 女子で 13％にすぎない。このことから友人とのパーソナルなコミュニケーション手段を保有し，交際や活動範囲の広いものほど性行動は活発であったといえる」ということであった。

最近の若者はほとんどが携帯電話を保有しており，現在携帯電話の契約台数は約 7,244 万

台[11] であり，依然増加している。

今回の調査対象の大学生もほとんどが携帯電話を所有しており，そのうえ一人暮らしをしている学生が多く，友人とパーソナルなコミュニケーションをとりやすい状況にあり，性交を経験した学生が多い結果になったと考える。

3）性交経験の人数

両群の性交経験者の内，約 6 割の学生は 2 人以上の対象と性交の経験があった。

これは未婚者の性交に対して「してもいい」と回答した学生が多かったことと，性交を容認する理由が「納得していればよい」「愛し合っていればよい」と答えた学生が非常に多かったことと関係し納得していれば，愛し合っていれば誰とでも性交渉を持つという，最近の青年の性行動を如実に表していると考えられる。

嘗ては，性交に到る理由として「結婚＝性交」の考えが一般的であったが，その考え方は薄れてきており，「お互いが納得していればよい」に代表されるように，性交に到る過程は，非常に刹那的でその行為から当然派生するであろう現実や結果に伴う責任を直視しないまま，安易に複数の対象と性交渉をもっている学生が増えている。

4）避妊の実態

田辺ら[10]は「未婚者の 96.1%，既婚者の 77.2% がコンドームを使用している」と報告しており，梶原[2]らの調査では「毎回避妊していると答えたのは 57.5%」であったことから，両調査間に異なる結果が認められた。

今回の対象者は約半数の学生が必ず避妊を行っており，梶原の調査と同様の結果であった。しかし，「避妊しない時」があった学生が約半数あり，これが望まない妊娠や性感染症につながるといえる。

堀口ら[15] の調査では「エイズに感染する可能性が全くないとあまりないと回答した学生を含めると最も少ない年でも 70% 近い学生が自分はエイズに感染する可能性は低いという回答であった」。

このことから学生にはエイズに対する危機感はなく，学校で講義を受けてもあまり感心がわかないのではないかと思われる。したがって，今後性教育でどのようにエイズについて指導していくかは重要な課題である。

クラミジアは世界で最も症例の多い感染症とまで言われている[13]。しかし名前を知っている学生は 80% ほどであるが，具体的内容については 90% もの学生が知らないと答えていた。

性感染症のすべてとはいわないが症例の多いもの，増加傾向のものについては性教育で充実させていく必要があると考えられる。

学生は性交と引き換えに何を得られるのか，また，妊娠，中絶，性感染症罹患という事態がおこることについて真剣に受け止めることなく，安易に性交している現状をあらわしており，また，「お互いが納得していれば性交してもよい」に代表されるように，性交は二人の人間関係が真の愛情のレベルで行われているのではないという現実がある。

性教育は，お互いの人権を認め心身及び社会的側面から科学的根拠に基づく性教育をすることにより避妊に対する取り組みが前向きに実現されると考える。

5）避妊をしなかった理由

今回の調査結果は「避妊具がなかったから」という理由が最も多く，「面倒くさい」が次に多く，「妊娠しないと思った」という答えも多かった。

これらのことから避妊器具がないのに性交を行っている。また，「妊娠しないから」と思って安易に性交している現状がある。「快感が損なわれる」「雰囲気が損なわれる」などと答える学生がおり，快感や雰囲気のためには避妊せずに性交している学生がいることもわかった。

金田ら[3]の調査によると「コンドームがなかったからが男性 27.1%，女性 48.6%，面倒くさいからが男性 39.6%，女性 17.1%，快感が損なわれるからが男性 29.2%，女性 25.7%，妊娠しないと思ったからが男性 10.4%，女性 37.1%，言い出せなかったからが男性 0%，女性 28.6%，雰囲気が損なわれるが男性 8.3%，女性 8.6%，――」と報告している。

今回の調査で避妊しなかった理由として「避妊具がなかったから」，「面倒くさい」という理由の順位は先行研究と同じであったが，「避妊具がなかった」という理由の回答率は今回のほうが多かった。

なかでも医学部の学生が多かったことは，性

教育を受けた率や避妊及び性感染症に関する知識や正解率が医学部のほうが有意に高かったにもかかわらず，避妊具がなくても，一時の感情や雰囲気に流されて性交をしており，知識はあっても行動が伴っていない現実を如実にあらわしている。

医療の現場においても，患者様は知識を持っていても健康指導を受けたことを実現することができない現実がある。

特に，痛いとか，痒いとかのように現実に不快な症状に対しては，必要なことは守るが，不快な症状とは反対の快感を伴う性交については，将来性感染症や妊娠という重大な問題が発生する可能性を孕んでいるにもかかわらず，その場の快感に流されてしまう現実がある。

このような状況を転換するような，知識を行動化できるための性教育の開発が急がれる。

6）避妊方法

藤沢ら[10]の調査では「コンドームが全体の95.6％であり，次いで膣外射精の13.2％，オギノ式の6.7％の順であった」という。

今回の調査でも同様の結果であり，このことから「コンドーム」が最も普及している。これは性教育でエイズについての教育を行う際に予防方法として「コンドーム」を挙げており，性感染症予防に有効であったと教育されているためであると考えられる。

また，コンドームはコンビニエンスストアでも販売されるようになり，容易に購入することができるため使用率が高かったと考えられる。

コンドームは男性が使用する避妊器具であり，男性が拒んだ場合，避妊することができない。

女性用のコンドームが一時発売されていたが，一昨年発売中止になったことも含め，女性が主体的に行える避妊方法を女性に教えていくことが必要である。

また，注意しなければならないのは「膣外射精」を避妊方法に挙げている学生が多くいることであった。膣外射精は避妊方法といえるものではない。

射精前の分泌液にも精子が含まれているので，射精を膣外で行っても精子が子宮内に到達する可能性があり，膣外射精を避妊方法として使用することは，望まない妊娠に至ることが考えられる。したがって今後の性教育では膣外射精は避妊方法ではないことも指導していく必要がある。

7）避妊の決定者

金子ら[5]の調査では「二人で」決めるものは男性47.4％，女性66.3％「自分で」は男性45.8％，女性で11.6％，「相手が」は男性5.1％，女性16.3％であった」と報告している。

今回の調査は，先の調査と比較すると「お互い」と答えた学生が67.3％と増加していた。金子らの調査では「女性が嫌われたくないという意識をもって言い出せないでいる」とされているが，今回の結果は「嫌われたくない」という意識よりも，「妊娠を避けたい」という思いが強まり意識を表示しているものと考えられる。

8）避妊の意思表示

金子ら[3]の避妊の意思表示調査結果は「多くしたものは全体の55.9％，少ししたものは26.0％，全然しなかった者は12.7％であった。意思表示をすこしした全然しなかったその理由として「快感が損なわれるからが男性26.0％，女性7.0％，雰囲気が損なわれるからが男性16.0％，女性7.0％，言い出せなかったからが男性6.0％，女性24.1％，妊娠しないと思ったからが男性10.0％，女性10.3％，安全日だと思ったからが男性10.0％，女性10.3％，――」であった。

今回の調査は意思表示の程度については先行の調査結果とほぼ同様であったが，意志表示しなかった理由は「妊娠しないと思った」「安全日だと思った」が上位であった。

このことから妊娠しないと思えば避妊しない学生が多いが，基礎体温についての知識が十分ではなかったことから，本当に安全日を予測できているかが疑問である。また，排卵日は確実に予測できるものではないので安全日だからといって避妊しない，意思表示しないというのは望まない妊娠につながるなど思わぬ結果を招くと考えられる。

医学部の学生に「相手がいつも避妊するから」と答えた学生が多いのは医学部の回答者に女子が多く，男性にお任せの姿勢も伺える。

金子らの調査でも女性のほうがこの項目に回答した学生が多く，女子がこのような回答するのは，現在の避妊方法はコンドームが最も多く，コンドームは男性が行う避妊方法であったため

相手(男性)が避妊すると回答した学生が多かったとも考えられる。

結　　論

1．性教育の現状について

1）性教育は小学校, 中学校, 高校で受けており, 医学生は工・教育学部に比較し受講率が高かった。

2） 内容では，生理的側面について学習した学生が 8 割以上と多く，性行為随伴症状は 5 割以上, 心理的側面については少なかった。

3）性教育を役に立ったと答えた学生が約 6 割であった。今後学習したいと回答した内容は，生理的側面はごく僅かで性行為付随側面，心理学的側面は 3 割弱であった。

2．性の情報源について

1）最も多いのは友人，次に多いのはマスメディアであった。

2）学校の性教育や教師から情報を受けた学生は少なかった。

3．避妊方法に関する知識について

1）基礎体温法と経口避妊の用語は医学部が有意に知っており，コンドームについては 100％前後の学生が知っており差はなかった。

2）基礎体温法，コンドーム，経口避妊の内容に対する正解率は，いずれも約半数の項目において，医学部の学生が有意に正解していた。

4．性感染症という用語の認知について

1）エイズ以外の性感染症全てに関して医学部学生が知っている割合が有意に多かった。

2）両群共に認知率の順位は，エイズ，クラミジア，梅毒であった。

5．性行動の現状について

1）未婚の性交の容認については医学部が 85％, 工・教育学部が 78％であり，「納得していればよい」と答えた学生が両群ともに 80％以上であった。

2）性交の経験も工・教育学部が 68％，医学部が 66％で差はなく，性交対象人数も近似しており, 2 ～ 5 人の複数との経験者が両群共に約 50％であった。

3）初めての性交の経験年齢は工・教育学部が有意に低かった。

4）性交時に避妊を必ず行う学生は両群ともに約半数であり，行わない学生の理由は避妊具がなかった，面倒くさいが上位であった。

5）避妊を決定したのはお互いが最も多く，妊娠しないと思えば避妊の意思表示しない学生がいた。

6．性教育受講率や性に関する知識は医学部が有意に高かったが，実際の性行動は両群間に有意差はみられず，性知識はあってもそのことが性行動に反映されていなかった。

研究の成果と限界

本研究の成果としては，性教育を受けた知識の程度や理解が性意識や性行動への変化に影響していない現実を明らかにした。このことを踏まえた性教育の計画の必要性を示唆することができた。

限界としては，過去に「性教育」を受けたか否かやその内容について調査した部分があるが，その結果については遡及的研究の欠点である信頼性についての評価には限界がある。

謝　　辞

本研究を行うにあたり，ご協力いただきました山梨医科大学と山梨大学の 1 学年から 4 学年の学生の皆様に深く感謝の意を表します。

引 用 文 献

1）厚生省「平成 12 年母体保護統計報告」

2）佐藤香代，浅野美智留，松本昌子．大学生の性の実態とこれからの性教育- 助産の視点から-. 母性衛生．2002．43（1)，28-35

3）木村好秀，菅睦雄．人工妊娠中絶の動向と実態．リプロダクティブ・ヘルス／ライツ　性と生殖に関する健康と権利．ペリネイタルケア 1998 夏季増刊．メディカ出版．116-125

4）家坂清子．私たちの行った調査から　性教育. 産婦人科治療．76（4)．1998．440-441

5）金田弓子，宇都宮理絵，下薗尚子．大学生の避妊に対する意識と行動. 母性衛生. 1997. 38(1), 18-24

6）日本性教育協会．第 5 回青少年の性行動全国調査報告．日本性教育協会．2001
7）文部科学省．旧学習指導要領．1998
8）日本性教育協会．性教育　新・指導要項　解説書．日本性教育協会．1990．9
9）河野美香．青少年の性感染症に対する意識．四国医学雑誌．2001．57（6），175-180
10）藤沢良子, 高橋恒男, 早坂浩志, 立花クニ子, 高橋トヨ，佐藤加代子，高澤勝子．避妊に対する大学生の意識・行動調査．全国大学保険管理協会．1999．CAMPUS HEALTH．35．596-599
11）携帯電話事業者別契約数．社団法人　電気通信事業者協会
12）田辺清男，山本百合恵，酒井のぞみ，浜谷敏生，吉村泰典．わが国における避妊の実態．産科と婦人科．1998．5（15）．565-574
13）梶原祥子，箆伊久美子，牛島廣治．看護女子学生の性に関する意識と行動からみた性教育についての一考察．思春期学．2000．18(3)．249-256
14）堀口祐子, 張谷秀章, 高安ツギ子, 斉藤端子, 谷中美津江．大学生とエイズ～アンケート調査の結果より(4)～．全国大学保険管理協会．2002．CAMPUS HEALTH．38（2）．401-404
15）野口昌好，岡本俊充，保條説彦，薮下広光，浅井光興，中西正美．クラミジア感染症．産婦人科治療．1992．64（1）．34-37

— 2006.1.27 受稿，2006.3.18 受理 —

要　　旨

医学部と工学部・教育学部学生の性教育の受講状況や性，避妊などに対する意識と知識の有無や程度と性行動を比較検討することを目的に調査した。2002 年 7 月に山梨県の国立大学工学・教育学部（男性 54%，女性 46%）・医学部（29%，71%）学生 720 名を対象に，性意識，性教育の受講，性情報源，避妊や性感染症の知識と性行動の関係を調査した。調査の可否は本人の意思で決定できることを説明し協力を得た。回収率は 66.4%有効回答率は 59.0%であった。性教育は両群共に 98%の学生が受講し，内容は A 生理学，B 性行動，C 心理的の順であり，B は医学部，C は工学・教育学部が有意に多く，性の情報源は友人からの場合が多く，次ぎが漫画からで，両群に差はなかった。避妊方法や性感染症の知識の半数は医学部が高かった。性交の是認は「納得していれば」と「愛していれば」という理由で両群共に約 8 割の学生が容認し，経験率は 68%でその内 6 割の学生が両群共に 2 名以上と半数が避妊無しで性交していた。性教育の受講程度や性・避妊に関する知識に差があったが，避妊をしないまま，性交をするという性行動には差がみられなかった。

キーワード：大学生，性教育，性知識，性モラル，性行動